

レールモントフのバラード『論争』の争点*

木 村 崇

1

1841年4月23日、レールモントフ（М. Ю. Лермонтов）は「Спор」（『論争』）という暗示に満ちた題名のバラード形式の詩を携えて、スラブ派の青年サマーリン（Н. Ф. Самарин）のもとを訪れた。発刊まもないスラブ派の機関紙『モスクワ市民』（«Москвитянин»）にそれが掲載されるように取り計らってくれないかと、頼みに行ったのである。ふたりの間になにか論争があったことはサマーリン自身の言葉から確かである。ただ、その論争はかれらのあいだに生まれたばかりの友情をそこなわなかったばかりか、親しくなったよしみで頼みごとをしようと思う程度の関係を保っていたことも確かである。編集部からのコメントをつけず、ただ作者名だけを明示して掲載してほしいというのが、レールモントフの条件だった。

レールモントフがこの時モスクワに滞在していたのは、去る4月11日に、48時間以内にペテルブルグを引き払ってカフカーズのテンギン歩兵部隊に復帰せよとの命令を受け、4月14日文字通り追われて首都を出てきたためである。

ついその三月まえ、カフカーズからモスクワにたどり着いたときかれは、もう南へ下ることはない決めていた。その年の1月14日、念願の2

*本稿は、1985年10月19日に日本福祉大学で開催された日本ロシア文学会の研究発表会二日目に、筆者が行った口頭報告の草稿に大幅な加筆修正を施したものである。

か月間の休暇許可が出て、カフカーズ・黒海戦線軍司令官グラッベ将軍（генерал-адъютант П. Х. Граббе）から元カフカーズ総司令官エルモローフ将軍（генерал А. П. Ермолов）にあてた私信を届ける役もおおせつかって内地へ戻ってきたときは、かれは退役の可能性をかたく確信していたのである。今後の創作プランが煮詰まっていたし、『祖国雑記』誌（«Отечественные записки»）には連続的にかれの詩が掲載され、初版1000部がたちまち売り切れてしまった『現代の英雄』（«Герой нашего времени»）の第2版の出版準備も順調にすすんでいた。3月9日が休暇切れでペテルブルグを立たねばならなかった最後の日であったが、かれは例によって祖母エリザヴェータ・アルセニエーヴァ（Е. А. Арсеньева）の奔走のおかげで延期許可をものにできた。それは、思った以上にむずかしいことだった。強いひきが上にあったからこそようやく許可に漕ぎつけることができたものの、最初この願いはにべもなく却下されたのである。思い返してみれば、たしかにその時よぎった悪い予感、どこか因縁めいていた。4月11日になって、参謀本部の当直将校クレインミヘリ伯（граф П. А. Клейнмихель）から突然の呼び出しを受け、48時間以内に首都を出よ、カフカーズの原隊へ復帰せよと云われたときは、かっとしてしまい、『祖国雑記』の編集者クラエフスキー（А. А. Краевский）のところに駆け込んで、憤懣をぶちまけたが、じっさいには、休暇の延期を続けてずると退役にまで行き着こうと考えていたのがあまかったのだ。首都での充実したしあわせな3か月のあいだに、一方ではかれのことを快く思っていない権力者やその近習たちの宿意が昂進し、排斥の空気が形成されていたのをすっかり忘れていたのだった。

4月12日、首都滞在中足しげくかよったサロンのカラムジン家（Карамзины）で、あわただしくお別れ会が催された。翌日友人のヴラジーミル・オドーエフスキー（В. Ф. Одоевский）から、全部書き埋めて返してくれと上書きされた、愛用のノートをもらった。4月14日朝8時レールモントフは、『祖国雑記』誌に掲載することにした詩をたくさん書き込んだノートを残して、ひとまずモスクワに向けて出発した。この時の気持を直截に

詠んだ有名な詩《Прощай, немытая Россия》(『さよなら、不浄のロシア』)はどちらのノートにも書かれていない。オドエフスキーのくれた新しい方のノートに書かれて残っているのは、《Утес》(『絶壁』)、《Сон》(『夢』)、《Тамара》(『タマーラ』)、《Свиданье》(『あいびき』)、《Листок》(『一枚の葉』)、《Выхожу один я на дорогу》(『わたしはひとり道に出る』)など、20代なかばの若さで円熟の域に入った詩人のこの時期をかざる、様々なジャンルの十数篇の詩と、未完の小説《Штосс》(『シュトス』)の草稿であり、《Спор》(『論争』)もこの中に入っている。したがってサマーリンに託したのは写しである。

レールモントフは『論争』を手渡すと、半時後にはもう馬車の中の人となっていた。この詩はほどなく『モスクワ市民』誌のNo.6に希望通りの条件で発表された。ノートの原本との若干の異同はたんなる誤植である。

レールモントフといえば、『祖国雑記』誌を主な発表の場とする詩人・作家であるということがひろく認められていたから、あえて思想的立場を異にする雑誌を指定したうらにはなにかありそうだと考えるのは自然であろう。たぶんスラブ派の(思想史的厳密さを期せば、30年代のごく末期に表れたこの傾向を、スラブ派に分類することには問題がある。ここでは、のちに分岐してゆくスラブ派のひとつのおおまかな〈源流〉とでもいうような意味で使っている)人々もさまざまな憶測を働かせただろうし、一般の読者も謎めいたものを感じたにちがいない。ただ、『祖国雑記』誌の編集方針や政治的・思想的立場にも完全に同意だったわけではなく、編集者クラエフスキーに対して、自分で新しい雑誌をだすとさえいつていたことでも、それは明らかである。詩人の退役願望は、そのことに直接関係するものだったらしい。作品の発表先の雑誌が意表をつくものであったうえに、一読してわかるように、詩そのものが、きわめてアレゴリー性の高いものであった。そのため、スラブ派の人々が、「工作」の成果あって、レールモントフを自分たちの陣営に引き入れることに成功した、と考えたとしてもおかしくない状況は、たしかにあった。

前の年、つまり1840年、駐露仏大使の息子で同大使館付き駐在武官で

あったエルネスト・バラント (E. Barante) との決闘が露見して、再度カフカズの第一線の部隊へ強制配属となり、途中モスクワで旅装を解いたとき、レールモントフはゴーゴリ (Н. В. Гоголь) の誕生会に招かれた。5月9日のことである。場所はスラブ派の指導者のひとりで、モスクワ大学教授の歴史学者ポゴジン (М. П. Погодин) の邸宅の庭園で、レールモントフはここで物語詩『ムツィリ』(«Мцыри») の一節を朗読した。どういふいきさつでかれが招かれたのかはよくわからない。詩人がモスクワ大学の入学試験を受けたとき、ポゴジンが歴史の試験官で、入学後かれの講義は熱心に聞いていたらしいから、そんなつながりで声がかかったのかもしれない。くわえて、レールモントフの詩にはスラブ派的心情が敏感に反応しておかしくない要素がないわけではないので、かねがね目を付けられていたのかも知れない。何人かの人が当日の参加者名を控えているが、その中にオルロフ (М. П. Орлов), ホミャコフ (А. С. Хомяков), サマーリン, キレーエフスキー (П. В. Киреевский), シェヴィリョフ (С. П. Шевырев) などのまぎれもないスラブ派が顔をそろえており、しかも宗教がひとしきり話題になったというから、しくまれた会合であったという臭いがいかにもすることは、否定できない。

バラードのかたちをとった詩『論争』を読むには、こういう背景を十分計算にいれておかなければならないであろう。その場合三つの局面での読解が必要になる。ひとつは、詩のテキスト自体に込められたものの読解である。ふたつめは、台頭しつつあったスラブ派と詩人との思想的・個人的関係というコンテキストの読解である。三つめは、題名の持つ多義的な意味の理解である。これらを三つの、明瞭に区分された対象だと考えてはいけなない。それらは密接に関連しあって、ひとつのまとまった〈テキスト/コンテキスト・コンプレクス〉をなしているものと見なければならぬのである。これまでの研究は、とはいってもすべてソ連でなされたものであるが、この論文で批判的に検証する通り、こういった複雑な対象にアプローチするには、あまりにも粗削りな理論的枠組みしか用意してこなかった。読解する側が無意識のうちに立脚している基盤(哲学的, 社会意識的,

政治思想的、社会・経済発展観的なものの混然とからみあった)を生み出したコンテクストが、その制約を作り出していると思われる。その意味ではわたしたちも例外ではない。ただちがいはひとつ、「無意識のうちに」ではなく、意識して、相互対照的にアプローチ点を確かめつつ研究する、というところにあるのである。

わたしたちがそのような立場から『論争』の読解を試みる時、いやおうなくひとつの反証の形をとらざるをえない。ここで批判の対象としてとりあげるソ連での「通説」ないし「定説」は、大きくわけて三つの時期に属している。ひとつは40年ごろに盛んになった説、ついで戦後からアカデミヤ版レールモントフ全集の出る50年代にかけての時期の説、そして60年代から今日までの時期に有力な説である。これらはみなそれぞれの時期の時代的特徴を濃厚に帯びており、文学研究がいかに文学外的環境に左右され、制約を受けるものであるかという好例を提供している。わたしたちも、当然今日的で、ソ連の研究者からすれば、非ロシア・ソビエト的環境の制約のなかで反証しているわけである。しかし、すくなくともわれわれの読解は、読みの視点をずらしているというだけでも価値があり、さらにそのずれを意図的につくりだし、そのことを意識に反映させて作業しているということによって、自己の立場の相対化の契機を作り出しているという点でも意義が有るのである。

2

ソ連の研究者に時代を超えて共通している大きな特徴は、『論争』に描かれている〈東方〉(Восток)は、レールモントフの東方観そのものを〈直義的に〉イメージ化したものだと考えていることである。

たとえば1939年に出版されたあるレールモントフ研究書では、「Описание грандиозной панорамы необъятного Востока, отдельные страны которого обрисованы поэтом немногими, но самыми меткими, характерными чертами…詩人レールモントフがひとつひとつの

国を、言葉すくなにはあるが的確このうえない特徴を捉えてくっきり浮かび上がらせてみせた、茫漠たる東方の一大パノラマの描写…¹⁾と書かれており、詩の中の東方の国々の特徴付けは、レールモントフ自身の理解によるものであると、あきらかにみなしている。別の研究者によって1940年に刊行されたモノグラフも、「В стихотворении Лермонтова нет решительно никаких намеков на подымающийся Восток. レールモントフの詩には勃興する東方をにおわせるものは片鱗もない²⁾といて、ホミャコフ (А. С. Хомяков) が滅亡していく西洋を見限り、世界の宗教的再興の要素は東方にあると見ているのに対する反論として、この詩を解釈している。ほぼ同じころに書かれた論文にも、レールモントフの東方観にかんする同様の断定がみられる。1941年のレールモントフ研究論文二本を例に挙げる。一つは「Уже одними чисто стилистическими средствами разрешен вопрос, за кем превосходство: за одряхлевшими цивилизациями — болезненное богатство красок («роскошь», как тонко заметил в том же письме Белинский), за живой исторической силой — трезвость действия и пренебрежение к колористическому наряду.どちらが優位であるか、すなわち病的なまでに色彩の華麗さ (ベリンスキーがおなじ手紙の中で敏感にも指摘しているあの〈華美〉) をほこる老いぼれてしまった文明の側か、沈着に行動し、鮮やかな装束など気にも留めない活力ある歴史的な勢力の側か、という問題は、純粹に文体的手段だけをみても、解決済みである³⁾と主張しており、さらにもう一つも「Лермонтов дает в своих строфах очерк той же страны света — “Востока”, также отмечая его упадок и бездеятельность, обрекающие его на милость русского оружия.

1) Семонов Л. П. Лермонтов на Кавказе. Пятигорск, Орджоникидз. краев. изд-во, 1937, с. 193.

2) Гинзбург Л. Творческий путь Лермонтова. Л., «Хулож. лит.», 1940, с. 201.

3) Пумпянский Л. Стиховая речь Лермонтова. — Литературное наследство, т. 33 - 34, М., 1941, с. 416.

レールモントフはこの詩の中で、やはり衰微と無為こそが自からをロシアの武器のお情けにすぎよう運命づけているのだと指摘して、これもまた光の国である〈東方〉の寸描を行っている⁴⁾ といっている。

この傾向は最近まで受け継がれている。アンドローニコフ (И. Андроников) は「Или с Россией, или со странами Ближнего Востока — с «дряхлым Востоком», как называл его сам Лермонтов, — третьего пути для народов Кавказа быть не могло. Россияと共に行くか, 近東の, つまりレールモントフ自身が『老いぼれた東方』と呼んだ諸国と共に行くか, カフカーズの民たちには第三の道はありえなかった⁵⁾ と述べていることでも明らかのように, 東洋を「老いぼれている」と見ていたのはレールモントフ自身であると, 毫も疑っていない。スラブ派の研究者クレショーフ (В. И. Кулешов) も「Лермонтов осуждал завоевательную политику царизма на Кавказе. Но в то же время знал, что Восток от Тегерана и до Нила «спит глубоко уже девятый век». Вся его история — в прошлом. レールモントフはカフカーズにおけるツァーリズムの侵略政策を非難していた。しかし同時に, テヘランからナイルまでの東方は『深い眠りに就いてはやあしかけ九世紀』であることも知っていた。東方の歴史はすべてもはや過去なのである⁶⁾ と, やはり詩の中の東方評価は作者自身の観点だと解釈しているわけである。コーシェレフ (В. А. Кошелев) もスラブ派の文学観を研究した著書の中で, 同じ詩行を引用して「Запад и Восток — так обычно ставили вопрос славянофилы, решая его в пользу Востока. Но в отличие от славянофилов Лермонтов не связывал никаких иллюзий с феодальной неподвижностью и отсталостью Востока: 西洋と東方, スラブ派はふつうこのように問題をたて, しかもそれを解

4) Гроссман Л. Лермонтов и культура Востока. — Там же, с. 699.

5) Андроников И. Лермонтов. Исследования и находки. М., «Худож. лит.», (4-е изд.) 1977, с. 520.

6) Кулешов В. И. Славянофилы и русская литература. М., «Худож. лит.», 1976, с. 126.

くときは東方に軍配をあげるのもであった。しかしレールモントフはスラブ派とは違って、東方の封建的沈滞と後進性に対して、なんら迷妄をよせることがない』⁷⁾と書いている。『論争』をこのように読むことによって、そこにスラブ派とレールモントフの対立点を見出そうとする傾向は、かなり一般的である。レールモントフ研究者の側にも、コローヴィン (В. И. Коровин) のように、これとまったく同じ意見をはくものがある。かれは「Как раз те формы восточного уклада, которые Лермонтов воспринимал как мертвые, окостеневшие и застойные, всячески поэтизировались славянофилами. 生気を失い、硬直し沈滞しきったものとして、レールモントフが受けとっていた、まさにその東方的様式の諸形態が、スラブ派によって様々に美化されたのであった』⁸⁾と「受けとって」いるのである。この「一般的傾向」の理解にしたがえば、文化の新旧対立についていうなら、レールモントフは、東方も西洋もともに古びてしまっており、ロシアこそが若い、これからまさに伸びようとしている文化的勢力である、と考えていたということになるのである。世界的な注目をあつめているソ連の文学研究者ユーリー・ロトマン (Ю. М. Лотман) も『論争』を根拠に、「Русская культура, с точки зрения Лермонтова, противостоит великим дряхлым цивилизациям Запада и Востока как культура юная, только вступающая на мировую арену. レールモントフの観点からすれば、ロシア文化は世界の舞台に出てきたばかりの若い文化として、西洋と東方の偉大で老いぼれた文明に対抗するものだ』⁹⁾と断定する。『論争』についてソ連ではこのようにほとんど異論の余地ない解釈が定着しているのであるから、レールモントフ

7) Кулешов В. И. Этюды о русских писателях. М., Изд-во Московского ун-та, 1982, с. 102.

8) Коровин В. И. Творческий путь М. Ю. Лермонтова. М., «Просвещение», 1973, с. 53.

9) Лотман Ю. М. Проблема Востока и Запада в творчестве позднего Лермонтова. — В кн.: Лермонтовский сборник, Л., «Наука», (Ленингр. отд-ние), 1985, с. 10.

百科の次のような記述が現れるのも当然であろう。「Живая историч. сила России, народ к-рой мужает для грядущих свершений на арене всемирной истории, противопоставлена «дряхлому» Востоку, уже завершившему свою историч. миссию в жизни человечества. ロシアは、いまやその人民が世界史の舞台で活躍するときをひかえて成人しつつある、はつらつとした歴史的勢力であって、人類の生活においてもはやその歴史的使命を終えてしまった『老いぼれた』東方とは対照的に描かれている」¹⁰⁾

ほんとうにこのような主張をこめて、レールモントフは『論争』を書いたのであろうか。1841年の春、つまり決闘で非業の死をとげるわずか数か月まえ、詩人がどのような思想的高みにまで到達していたかを明らかにすることは、かれの全仕事を総括するうえで、きわめて重要な課題である。もし、定説どおりであれば、つぎの伝記上の事実との矛盾は、どう説明するのであろう。かれはこの詩を書く直前の3月から4月始めの時期に、『祖国雑記』の編集者キレーエフスキーと文化比較を話題にした。そのときレールモントフは、ロシアの知識人がこぞって西欧文化に傾倒して、フランス人をまねる風潮を批判して、彼自身はアジア人から多くのことを学んだ、アジア的世界観の奥義を極めたいと思っている、東洋は初めて知るようなことのいっばいつまったかくれた宝庫だ、といっているのである。¹¹⁾かれは東洋には、過去の文化しか残っていないとは考えていない。またその歴史的使命が終わったとも、いってはいない。他の文化圏のものが学ぶべきことを豊富に内包する、生きた文化がそこにはあるといっているのである。さらにだいじなことはレールモントフが、物質的な豊かさよりは(その点では、西欧は当時すでに爛熟期であったはずである)精神的な文化の豊かさを問題にしていた、という事実である。ソ連における『論争』解釈が、生産力至上主義的傾向を帯びているのは、誤読の由来を暗示する、

10) Лермонтовская энциклопедия. М., «Сов. энциклопедия», (АН СССР. Ин-т русской лит.), с. 525.

11) См. об этом: Мануйлов В. Летопись жизни и творчества М. Ю. Лермонтова. М. -Л., «Наука» (Ин-т русской лит.), с. 151 ~ 152.

きわめて示唆的な事実といえよう。

レールモントフは内地のロシア人とはちがって、自分の異文化接触の体験を深く内省し、着実に自分の思想へ血肉化させることのできた詩人である。カフカーズには、当時様々な経歴を持ったロシア人が定住したり、滞在したりしていた。しかしカフカーズでその多くは、植民地における本国人としてふるまった。異文化接触から自己変革へという生き方からはほど遠い存在である。また、ある意味で異文化接触の産物とみることのできる、カフカーズ人化した軍人(кавказец)である『現代の英雄』のマクシム・マクシームィチも、しょせんはそのようなタイプのうちのひとつに属する人間にすぎない。かれの「自己変革」は本国人と植民地のひとびととのあいだの、「緩衝材」にみずからを仕立てあげた、いや、より正確には、仕立てあがったということなのである。レールモントフの異文化体験は、何段階にもわたってなされたが、おそらくもっとも決定的なのは、実戦に参加して、地獄図を目撃したときであろう。

1840年7月のヴァレーリク川(Валерик)のほとりで展開された激烈な戦闘のあと、「Я к вам пишу случайно...」(『ふと思い立ってあなたに手紙を書いています...』)ではじまる詩が書かれた。レールモントフはこの過酷で悲惨な体験を、その中でひとつの〈文化接触〉として受けとめ、自分の内部に起こった重要な変化について述べている。—

.....Я жизнь постиг;
Судьбе, как турок или татарин,
За все я ровно благодарен;
У бога счастья не прошу
И молча зло переношу.
Быть может, небеса востока
Меня с ученьем их пророка
Невольно сблизили.....(II-167)**

**レールモントフの作品からの引用は、アカデミア版全集 [M. Ю. Лермонтов. Сочинения в шести томах. М. -Л., АН СССР. (Ин-т русской лит. (Пушкинский дом), 1954 ~ 1957.)] によるものとし、引用末尾に、巻数をローマ数字で、ページ数を算用数字で括弧にいれて本文中に直接表記する。

.....わたしは人生に悟りをひらいた
 定めとあらばトルコやタタールの民のように、
 なにもかもおしなべてありがたく受けよう。
 神さまにしあわせを乞うたりすまい、
 ふしあわせもじっとこらえよう。
 あれは東方の天なのかもしれない、
 この地の予言者のおしえにわたしを
 さりげなく近づけてくれたのは.....

これがレールモントフの到達したいつわらざる境地であったことは、クラエフスキーとの論議を対照すれば、いっそうあきらかであろう。また、『論争』よりも書かれた時期はすこしあとになるが、おなじく詩人の境地を直截に表現している《Выхожу один я на дорогу》（『わたしはひとり道に出る』）にもこの諦観にも似た悟りは語られている。—

Уж не жду от жизни ничего я
 И не жаль мне прошлого ничуть;
 Я ищу свободы и покоя!
 Я б хотел забыться и заснуть!

 Но не тем холодным сном могилы...
 Я б желал навеки так заснуть,
 Чтоб в груди дремали жизни силы,
 Чтоб дыша вздымалась тихо грудь; (II-208)

生からはもはやなにもものも期待すまい、
 過去もわたしにはすこしもおしくない。
 自由とやすらぎこそわたしのもとめるもの！
 ああ、ただひたすら眠りにひたりたい！

でも墓場のあのつめたい眠りはいやだ…
 わたしのひたりたい永遠の眠りとは、
 胸の中には生命の力がまどろみながら、
 息をすうたびしずかに胸のふくらむ眠り。

1840年から41年にまたがる時期の詩の中に、かれの思想的変化を読み取ることは、けっして的外れな作業ではない。たとえば、さきほど引用し

たユーリー・ロトマンもこの時期の詩人の、指摘されたような変わりようについては、言及している。ただ、なぜかロトマンは自分の言説の間にある矛盾に気付いていないだけである。しかしわたしたちは、こういう矛盾は本来ありえないはずだという常識的判断に立って、『論争』を読み直してみる必要がある。

3

レールモントフの東方に対する基本的な立場を踏まえたうえで、「Спор」の問題の行を読んでみよう。—

Все, что здесь доступно оку,
Спит, покой ценя.....
Нет! не дряхлому Востоку
Покорить меня! (II-194)

ここから眺望できるものすべてが
やすらぎにまさるものなしと眠っている。
できるものか! 老いぼれた東方に
このおれの征服などできるものか!

この科白を作者自身の、いつわらない言葉として読むのは無理である。形式的な面からいってもこれは、詩の中で藹たけたシャト山（＝エルブルス、Шат-гора＝Элбрус）と論争するカズベク（Казбек）が発しているのである。レールモントフが寓意的な詩のなかのひとつの〈性格〉に託して、直接自分の考えを述べるというようなことは、考えにくい。かりに、そういうことがあるにしても、それではなぜ、詩人の考えを託されているのがカズベク山であってシャト山ではないと、断言できるのであろう。ソ連の研究者は、このところを論証ぬきですませて、前述のような解釈をもちだしてくるのである。

「Спор」に描かれている Восток はたしかに色鮮やかな絵画のようで、エキゾチズムにあふれている。しかしこのような東方のイメージはレール

モントフの独創ではなく、もっと色あせ、もっと俗っぽいものではあるが、当時のロシアの多くの人たちが、所属する思想陣営をとわず、共有しているものであった。一例として、1841年の4月に発表されたと思われる『祖国雑記』誌XV号に載った無署名の書評の一部を挙げる。この書評子は、ピョートル大帝に関する歴史書を評する前に、自分の歴史観をとうとうと披瀝している。いま引用する部分のすこしあとで、スラブ派の典型的な考え方を辛辣にけなしていることで見当がつくのだが、論旨は全体として西欧派くさい。さて、かれは世界史を概括してつぎのように述べている。

「...но хотя китайцы и существуют, да еще в числе, как говорят, чуть ли не ста миллионов голов, однако они столько же принадлежат к человечеству, сколько и миллионы рогатых голов их многочисленных стад. Индийцы, египтяне, и особенно племена семитические, греки, римляне, — каждый из этих народов был звеном в цепи развития человечества, — был, но теперь уже не есть, ибо индийцы и египтяне теперь нечто в роде окаменелостей; а греки и римляне исчезли совсем с лица земли, уступив родную почву другим племенам. Мухамметианский восток расцвел пышным, хотя и мгновенным цветом; но и этому он обязан был той односторонней истине, которую выразил в многосторонней лжи своей. Аравитяне имели влияние на самую Европу <...>, — он уступил, потом пал, и теперь одряхлевший безжизненный труп Турции держится только милостью европейских держав. しかし中国人は現在も存在はするし、しかも数億「頭」になんなんとする数にのぼるとさえいわれる。けれどもかれらが人類に属する程度は、おびただしい数にのぼるかれらの有角家畜の群れが人類に所属するのと同じくらいのものである。インド人や、エジプト人、それにとりわけセム族、ギリシア人、ローマ人などは、これらの民族のひとつひとつが、人類の発展の鎖の一環であった。そう、たしかに一環ではあったが、もはやそうではない。なぜかといえば、インド人やエジプト人は現在では化石のようなものだし、ギリシア人やローマ人は、他の種族に自分たちの土地を明けわたして、

地上から完全に姿を消してしまったからである。回教徒の東方は、一瞬とはいえ華麗な色彩を帯びて広まった。しかしそれとでも、嘘を多面的にちりばめて表現した、かれらの一面的な真理によるものというべきである。アラブ人はヨーロッパにまで影響をおよぼしたが〈...〉、譲歩をしたあと、没落してしまった。そしていまは、老いぼれて生氣も失われてしまったトルコのむくろが、ヨーロッパの列強のおなさけになんとかすがりついているという有様なのである」¹²⁾

筆者はこのあとも、今日の歴史の常識に照らせば、ヒットラーばりの「アリア史観」としか思えないようなものを得意げに展開している。その「理論」にしたところで次のように、ヘーゲルから図式を借りてきて、荒っぽく焼き直したものにすぎないことは歴然としているのである。「Сущность истории составляет только одно разумно-необходимое, которое связано с прошедшим, и в настоящем заключает свое будущее. 歴史の本質をなすものは、ただひとつ過去とむすびついた理性的・必然的なものだけであり、またそれが現在のなかにその未来を含み込んでいるのである」¹³⁾と、まず「本質論」がひとくさりなされる。その後おもむろに自分の歴史概観の展開に移る。そういうやりかたが当時の流行であったようだ。西欧派であれ、スラブ派であれ、「歴史」の対する関心の強さはどちらも同じくらい強かった。さらに、社会の変化を「進歩・発展」という断面だけで評価しようとする態度も、ほぼ共通しており、どちらがどれか区別はつけにくかった。違いはただ、何を「進歩」とみるか、「発展は」いかにあるべきか、という点だけなのである。

わたしたちはここで、レールモントフが『論争』のなかで〈東方〉を修飾する形容詞として使っている「дряхлый, 老いぼれた」という、おなじみの表現にお目にかかる。書評子がトルコを評して「дряхлый, 老いぼれた」といういっているくだりのことである。この言葉は、おそらくアジア的イメージとむすびついたものにしばしば用いられた、「枕詞」のようなものであったことはまちがいない。そうでなければ、トルコの「むくろ」といっておきながら、それに「老いぼれた」などという語を修飾させるのは、

12) — Отечественные записки, 1841, т. XV, отд. V, с. 40.

13) Там же.

どうみても形容矛盾である。ことばが筆者の意識をすり抜けて、自動的に用いられないかぎり、こういうことは起こりえない。「дряхлый, 老いぼれた」とは、そのような種類のことばだったのである。そして詩人がそのことを考慮に入れて使用したにちがいないということに、じゅうぶん注意を払う必要があるのである。つまり、詩的言語の推敲過程でそれが選ばれたのは、詩人の詩的独創性を担った表現としてでも、あるいはかれ自身の思想の的確な表現としてでもなかったと、考えざるをえない。むしろ、世人のアジア理解をパロディー化する意図をもって使用した可能性が、きわめて高いと見るべきなのである。

げんにこの書評子も、自分が示した「アジア概観」について、「И вот Азия! Знаем, что мы тут ничего нового о ней не сказали <...> нам нужно было только напомнить читателю уже известное всем об Азии <...>これがアジアなのだ! とりたてて新しいことは何も述べられていないといえば、その通りである。<...>ただ読者に、アジアについてだれもがすでに知っていることを思い出させる必要があったから、そうしたにすぎない」¹⁴⁾ といっている。かれがながながと書き記した「アジア概観」は当時の人々が、最大公約数的にいただいていたイメージ以上の何物でもなかったわけである。レールモントフが『論争』のなかで描いてみせた〈東方〉(Восток)は、本質的にこれとそっくりなのである。だからといって、詩人も東方については、最大公約数的イメージ以上のものを持ち合わせていなかった、などということはいえない。カフカーズでかれが学んだものは、当時のヨーロッパ知識人としては、傑出した深さと広さをもっていた。そこで、こういう推測がなりたつ。レールモントフには、自分が世の多くの人々よりもはるかによく理解していた〈東方〉のイメージを『論争』の中で全面的、直義的に再現させるつもりなどさらさらなかった、ただカズベク山の形象を借りて、人口に膾炙しているそれを、できるだけ色鮮やかに提供しさえすれば、それで目的は達すると考えたのだと。

14) Там же, с. 47.

その理由は何であったのだろうか。それを考える前に、もうひとつ指摘しておかなければならないことがある。じつは、〈東方〉に対置して、詩の後半部分に出てくる〈北〉(Север)、つまりロシア(Россия)は、より「発展し進歩した」「産業時代」の「歴史的必然性と肯定性」をになった新しい文明勢力として描かれているものと、多くの場合解釈されているが、そのダイナミックなイメージの部分も、けっしてレールモントフ自身がそのように評価し、肯定する立場から描いたものではない、という事実である。

『モスクワ市民』誌の創刊号の巻頭をかざったのは、モスクワ大学教授で歴史学者のポゴジン(М. П. Погодин)の筆になる「ピョートル大帝論」(«Петр Великий»)と題する論文であった。例のゴゴリの誕生会を主催した人物である。論文にはピートル時代のロシアを、詩的といつていいほど高らかな調子で特徴付けた記述がある。それがレールモントフの詩の中のロシアと、これもまたうりふたつなのである。スラブ派は、一般にピョートル大帝を諸悪の根源視するのだが、それはまだすこし時代が下ってからのことである。『論争』の中のあの〈北=ロシア〉の大規模で力強い躍動と全く同じものが、ポゴジンの論文に書かれているということには、重大な意味が含まれている。『論争』という、まさに寓意性にみちて謎めいた詩を、あえてそのような思想的支柱をもった雑誌に掲載させるよう画策したレールモントフの、ひそかな意図がそこに見え隠れしだすからである。それはさておき、ポゴジンの描く「勃興するロシア」像を見てみよう。

かれがこの「勃興するロシア」の最大の特徴として挙げるのは、〈躍動性〉である。ピョートル大帝が作りあげたロシアをふりかえって、「Какое движение, какая деятельность, живость, во всех концах обширного Царства! なんという躍動が、なんという活気が、広大な帝国のすみずみにまでみなぎっていることだろう」¹⁵⁾と自ら感動にひたったポゴジンは、その偉大なる歴史的指導者の目を次のように描写する。もちろんかれが直接目撃したわけではないから、歴史家の「見てきたような」話の典型である。「Как горят его глаза, как движется все его тело! Смотрите — как поварачивает он головою направо и налево, как бросает свои

15) Погодин М. П. Петр Великий. — Москвитянин, 1841, ч. 1—я, № 1, с. 5.

pronзительные взоры во все стороны, и как работа вскипает у русского человека там, куда он оборачивается, <...> ああかれの目の燃えよう, その全身のきびきびした動きといたら! 見よ, かれのあの頭を左右にふり向けるさまを, 四方八方をにらむあの鋭い眼差しを, そしてかれが向きをかえて進む先では, ロシア人の仕事ぶりがどんなにか沸き立つかを <...>」¹⁶⁾ この一連の描写は次のようにしめくくられる。「Смотрите, как, по его движениям, то вдруг на севере из болота выскочит город, то на юге пустится по морю флот, то на западе встанет линия крепостей, то на востоке скорым маршем выступит в поход армия! 見よ, かれが動けばそれとともに, 北ではたちまち沼の中から都市が跳びだし, 南では海上に艦隊がくりだし, 西では要塞が一線をなして立ち並び, 東では軍隊が遠征にむけ急行軍で進み行くのを!」¹⁷⁾

レールモントフがポゴージンのこの論文を読んだのはまちがいない。創刊号の巻頭論文であり, 筆者は, 詩人がモスクワ大学時代にかなり熱心にその講義を聞き, つい一年前も, ゴーゴリの誕生会に招待してくれた相手である。スラブ派のサマーリンとは1838年からの知り合いで, モスクワでは1840年にも41年にもひんぱんに会っているから, どうぜん1841年の1月に発刊となる『モスクワ市民』誌のことは, 聞き知っていたはずである。そのコンテクストを踏まえて, 『論争』のつぎの詩行を読んでみよう。

Тайно был Казбек огромный	大山とはいえカズベクも内心
Вестью той смущен;	それを聞いてうろたえた,
И, смутясь, на север темный	うろたえながらもほの暗い北へ
Взоры кинул он;	自分の視線を向けてみた,
И туда в недоуменье	そしてそちらをおずおずと
Смотрит, полный дум:	思いにふけて見ていると,

16) Там же, с. 7

17) Там же.

Видит странное движенье,
 Слышит звон и шум.
 От Урала до Дуная,
 До большой реки,
 Колыхаясь и сверкая,
 Двигутся полки;
 Веют белые султаны,
 Как степной ковыль;
 Мчатся пестрые уланы,
 Подымая пыль;
 Боевые батальоны
 Тесно в ряд идут,
 Впереди несут знамены,
 В барабаны бьют;
 Батареи медным строем
 Скачут и гремят,
 И дымясь, как перед боем,
 Фитили горят.
 И испытанный трудами
 Бури боевой,
 Их ведет, грозя очами,
 Генерал седой.
 Идут все полки могучи,
 Шумны, как поток,
 Страшно-медленны, как тучи,
 Прямо на восток. (П-194~195)

異様な動きが目に映り、
 轟きやざわめきが聞こえてくる。
 ウラルの山からドナウまで、
 あの大きな川にいたるまで、
 揺らぎながらきらめきながら
 武装の群れが動いている。
 白い羽根飾りの吹かれるさまは、
 ステップのはねがやのよう。
 色とりどりの槍騎兵たちが
 砂塵舞い上げ馳せてくる。
 戦闘部隊が目白押しに
 隊列組んで歩いてくる。
 先頭に行くはためく軍旗、
 打ち鳴らされる軍太鼓。
 砲兵部隊は青銅の隊列をなし
 轟音上げて轟進してくる。
 火縄がさながら合戦前のように、
 煙りながら燃えている。
 いくさの嵐をかいくぐり
 きたえぬかれた人だろう、
 目に凄味をきかせて軍勢を
 率いる白髪の將軍。
 全軍が、まるで大河のように、
 力強く、ざわめきながら、
 黒雲のような恐しい緩慢さで
 一路東へ迫ってくる。

ピョートル時代と『論争』において扱われている時代とを重ね合わせるの
 はおかしいという、反論があっても不思議ではない。しかし、『論争』の時
 間設定自体はそもそもはっきりとしない。常識的に考えれば、詩の中の現
 在は、執筆時の現在を想定しているとも思われるが、(げんに多くの研究者
 がその前提で分析している)、そうすると奇妙な矛盾が出てくるのである。

27行目から28行目に「Род людской там спит глубоко/Уж девятый век. あそこの（東方の一木村）人間たちは深い眠りに就いて/はやあしかけ9世紀だ」というのが、どの歴史的時点を基準にしての計算かがよくわからなくなるのである。もちろんレールモントフの、世界史についての知識が誤っていたとは考えにくい。草稿では「10世紀」になっていたものを、わざわざ変えたのであるから、かれに何かの計算があったものと考えられる。「白髪の将軍」をエルモーロフ（А. П. Ермолов）将軍と特定することにも問題が残る。この詩を現実と一対一の対応関係を持った詩として読むのは、おそらく正しいやり方ではない。ここで詩がかかっているのは、ロシアと東方という、あるいは歴史的に早く文明を経験したところと、おくれて経験したところという、かなり時間的広がりのある現実的对象である。レールモントフはその大きな時間幅のなかで、現実の時間系を超えて詩的現実を構成している。ロシアの東方侵略はなにも19世紀初めに限ったことではない。むしろ、その全侵略史を詩行の中に込められていると見るべきなのである。

〈東洋〉の描写も、同じく、あるいはそれ以上に超時間的である。かりに、現実の時間座標に作品の場面を位置付けるとすれば、「現在」はカズベク山に道を切り開いてキャラバンが往来しているものの、まだ荒々しい開発の爪跡は付けられていない時点となる。カズベクは、プラタナスの木陰でズボンにワインをたらしながら居眠りしているグルジア人を見ているから、これはペルシアによるグルジア侵略のおさまった時期か（とすれば、ロシアへのグルジア併合後ということになるだろうか）、そのずっと以前の、いずれかであろうと見られる。詩によればテヘランもまどろんでいるわけだから、西欧の列強やロシアという大国の東方進出に翻弄されて手も足も出なくなった一時期のことをいっているのか、あるいはそれ以前の、ペルシアがおだやかだった時期のことをいっているのかもしれない。しかし、ベドウィンが襲撃を忘れていて、というのはいつの時点のことであろうか。もうすでに、エジプトの王朝はすべて絶え、エルサレムの足元には、神によって焼かれた（十字軍遠征を意味するのであろう）という死の国が無言

のままじっと広がっている時期というのでは、あまりにも幅がありすぎて、「現在」は特定できない。そのうえ例の、「いま」から数えて「あしかけ9世紀」にわたって東洋の人々が眠ったままでいるというのであるから、西アジアの歴史事実に照らし合わそうとすればするだけ、わからなくなってしまうのである。したがって、これは現実の歴史と社会の記述をめざしたものではない、と考えるべきである。さきに述べたように、これを、当時のロシア人の偏見に満ちたアジア・イメージだととれば、矛盾は消滅する。しかし詩の大部分が他人からの借物で構成されているというのであるから、これはたいへんなことである。にもかかわらず、そこにこの詩の核心があるのである。

4

レールモントフがこのような異様な詩を書いた理由は、『モスクワ市民』誌と、あるいはそのグループのメンバーとのなんらかの関係のなかに見出せるはずである。そうでなければ、掲載先をこの雑誌にしなければならなかった理由が、見当らないからである。もし、正面からの反論を意図したのであれば、対立陣営の雑誌のほうがよかったはずである。手の込んだ、変則的な「反論」を試みようとしたからこそ、ぜひとも『モスクワ市民』誌にこの詩が載る必要があったと見るのが自然であろう。

じつは、かれが同誌にうらみを抱いたとしても納得のいく、ある事実がある。『モスクワ市民』誌の創刊号には、ポゴージンの巻頭論文の他に、シェヴィリョフ (С. Шевырев) のスラブ派文明論的文芸批評とでもいうべき大論文『ヨーロッパの現今の知的状況に対するロシア人の見解』(«Взгляд русского на современное образование Европы») が掲載されている。その終りに近いところで、シェヴィリョフはきわめて唐突に、『現代の英雄』をこきおろしている。作者名や作品名は伏せてあるが、しかしまぎれもなくレールモントフとその評判の長編小説のことだとわかるように書いているのだから、かえって底意地が悪い。つづいて、No.2 において『現代の英雄』論』を、No.4 で「レールモントフ『詩集』の批判」を、

こんどは書評の形で載せた。この二つの書評は、ベリンスキーがレールモントフを高く評価して論陣をはっているのに対抗したもので、論敵憎しの気持を露骨に示す挑発性を帯びていた。レールモントフはその格好の標的として、狙われたのである。

シェヴィリョフはなかなかの健筆家で、『モスクワ市民』誌には毎号のように大きな労作を載せており、たしかに力のある批評家であることはまちがいない。そのうえ、詩作にも筆をふるい、それも雑誌に発表するという才人である。しかしその理論は、自信がわざわざいして、いささか暴走ぎみである。たとえば、かれの欠点のひとつは異文化の理解に鈍感なことであろう。『現代の英雄』の中の「野生」のチェルケス娘ベーラ（Бэла）と「文明社会」の公爵令嬢メリー（Мери）の「いいところ」を重ね合わせて、異文化を「混合同化」させた人物が描かれるべきであった、などという発想を、なんの抵抗もなしに出してくるのである。もっとも、そういう非文化的な読み方が、当時は大勢を占めていて、かれはそれを批評家として代弁したにすぎない。これもまた多数意見の代弁といってよいが、かれは主人公ペチョーリン（Печорин）に西欧に固有の「病い」を見て、それはロシア社会にとってけっして本質的なものではないし、本来的でもない、と断言してはばからなかった。シェヴィリョフ以外にも同じような批評をするものが目立ち、この類のジャーナリストたちの批評水準の低さに憤りを覚えたレールモントフは、『現代の英雄』の第二版を発行するとき、急拠序文を付け加えて逆批判している。

レールモントフは前年の5月にゴーゴリの誕生会の席でポゴジンやシェヴィリョフと一定の接近をしている。シェヴィリョフのあからさまで、問答無用なやりかたは、なまじ顔見知りであっただけに、誇り高いレールモントフをひどく傷つけたにちがいない。レールモントフにとって、もっとも許しがたかったのは、おそらく、かれの処女詩集に対する「剽窃」、「ものまね」よばわりだったであろう。レールモントフの場合、реминисценция（他者の作品の無意識的な影響、類似関係）あるいは、автореминисценция（自分の他の作品との無意識的な類似、一致）とい

う現象はたしかにある。それをシェヴィリョフのようなやりかたで、意地悪くあげつらわれ、詩集を出すのはまだ早すぎるなどといわれたりすれば、詩人の不快は飛躍的に昂進したはずである。精選に精選をかさねてまとめたつもりが、ここまで酷評されたのでは、レールモントフとしても、だまって引き下がるにはいかなかった。

レールモントフは次のような酷評の載った『モスクワ市民』誌 No. 4 を、どんなに遅くともサマーリンと再会した4月20日ごろには見ているはずである。「Когда вы внимательно прислушиваетесь к звукам той, новой лиры, которая подала нам повод к такому рассуждению, вам слышатся попеременно звуки — то Жуковского, то Пушкина, то Кирши Данилова, то Бенедиктова; примечается не только в звуках, но и во всем форма их созданий; иногда мелькают обороты Баратынского, Дениса Давыдова; иногда видна манера поэтов иностранных, — и сквозь все это построннее влияние трудно нам доискаться того, что собственно принадлежит новому поэту и где предстаег он самим собою. このように判断するのがたしかに根拠のあることだということは、その新らしい立て琴の音にじっと聞き耳をおたてになればわかるとおもうが、われわれの耳にかわるがわる入ってくる音色は、ジュコフスキーであったり、プーシキンであったり、キルシャ・ダニーロフであったり、ベネディクトフであったりする。音色だけではない。あらゆる所にかれらの創作物の形態は見受けられるのである。バラトゥィンスキーやデニス・ダヴィドフの言い回しがちらちら見えたかと思うと、ときには外国の詩人たちの様式が見えたりする。だから、こういったあらゆるよそからの影響を通してみるかぎり、この新しい詩人にとっては何がいったい本人自身のものなのか、かれが自分自身として現れるのはどこなのか、つきとめるのは困難である」¹⁸⁾。この批評をみて、レールモントフはごく短時間で仕返しの方法を練ったにちがいない。それは、シェヴィリョ

18) Шевырев С. Стихотворения М. Лермонтова. — Москвитянин, 1841, ч. 1-я, No. 2, с. 527.

フやポゴージンの文章中の表現を換骨脱胎して用いながら、全体として全く別の主張をそこに潜り込ませる、という頭のよい反撃方法であっただろうというのが、われわれの仮説である。

シェヴィリョフは『モスクワ市民』誌の創刊号の大論文で、ロシアに影響を与えたヨーロッパの二国、イタリアとイギリスを比較している。それによれば、イタリアが、いまでは現代工業からほとんど取り残され、あわれなボロをまとい、芸術と過去の栄光を誇るばかりなのに対して、イギリスは、貧欲に現実世界の富をものにし、全世界を自分たちの商業と工業のかせで絡めこもうとしているのだ、という¹⁹⁾。この発想をすこし変形すれば、当時盛んになされていた、〈東方〉と〈西欧〉の比較の図式にかんたんに重なりあうことは、明らかである。つまり、イタリアを「おいぼれた」東方に置き換えてやればよいのである。文明比較論者のマクロな図式においては、地理的・歴史的具體性は、ほとんど無視されてしまう。レールモントフに、そういった、大ざっぱで独断的な議論に対する異議があったのはまちがいない。『論争』のなかの〈東方〉と〈北〉という構図はこの「マクロな図式」を下敷きにしたものであることは、容易に想像がつく。そうすると、レールモントフは、シェヴィリョフが考えていたのとは違って、ロシアをイギリスと本質的に同じだと規定したことになるわけである。

ホミャコフは、『論争』がシェヴィリョフの悪意のこもったレールモントフ評価に対する巧みな反撃であることに、うすうす気付いていたらしい。ところがおもしろいことに、当のシェヴィリョフは、これをなかなかいい詩だと、褒めたといわれる。「〈東方〉と〈北〉(=ロシア)という構図」が含んでいる世界観がかれの共鳴をよんだからだと、理解すべきであろう。『現代の英雄』の第二版に、ちょうど同じころ、いそいで書き足した序文に今日のロシアの読者層(批評家も含めて)は教養がないから、「современная образованность изобрела орудие более острое, почти неви-

19) См.: Шевырев С. Взгляд русского на современное образование Европы. — Москвитянин, 1841, ч. 1-я, № 1, с. 221.

димое, и тем не менее смертельное, которое, под одеждою лести, наносит неотразимый и верный удар. 現今の知的水準は, ほとんど目には見えないのに, それでいて確実に致命傷を負わせることのできるもっと鋭い武器の発明をものにしており, おべっかでカムフラージュし, それで相手に反撃の間もあたえずに打撃を加える」(下線—木村, IV-202)ということを知らないと書いている。シェヴィリョフはレールモントフから, かれの自信に満ちた大論文の題名をもじられ, まさに「反撃する間もあたえられずに打撃を加え」られたのであった。

スラブ派の文学観について研究したコーシェレフは, ポゴージンやシェヴィリョフをスラブ派に数えることには反対している。たしかにかれらはこの時点では, 一種の「生産力至上主義」, あるいは「発展史観」に陥っているから, スラブ派としては「不純」であり, そういう説も成り立ちうる。レールモントフがそのこのところを突いて「打撃を加えている」以上, この問題はおろそかにできない。しかし, だからといって彼らとその論敵との違いが消えてしまうわけではない。当時はまだ, <スラブ派>も<西欧派>も世界観の点で, 時代の影響による共通性を未分化のかたちで持ち合っていただけである。直接的にはヘーゲル哲学の呪縛がそれだけ強かったからであろうが, もっと根源的には, 先進的な世界における近代化が, きわめて強力で大規模で, 資本主義の急速な発展自体が普遍性を有することは, だれも否定できなかつたからだと考えるべきであろう。西欧をはげしく批判していた後進国ロシアの忠実なる臣民が, 一方で先進的工業社会に羨望の眼差しを向けたのは不思議でない。この矛盾をうまく合理化してくれるのがナショナリズムの思想であることは, 古今東西をとわず, 同じである。「和魂洋才」ならぬ「露魂欧才」というわけである。その意味でレールモントフのほうがむしろ, 当時としては例外的に「時代の思想」を超越しつつあったのである。

ポゴージンもシェヴィリョフも, 思想的には保守反動の陣営に属していた。ロシアにおけるナショナリズムをいち早く定式化したのは, この陣営であった。かれらの言論活動の中心をなしていたのは, 国民教育相ウ

ヴァーロフ (С. С. Уваров) 伯の唱えた〈三元主義〉(триада)のお先棒かつぎの仕事である。たとえばポゴージンは、『ピョートル大帝』をしめくくるにあたって「... с императора Николая, которого министр в троесловной своей формуле России, после православия и самодержавия поставил народность, 〈...〉 начинается новый период русской истории, период национальный, которому, на высшей степени его развития, будет принадлежать, может быть, слава сделаться периодом в общей истории Европы и человечества. Николай帝の御代になって大臣が正教, 専制のつぎに民族性を置き, この三語でロシアを定式化した, その時から〈.....〉ロシア史の新時代が, 民族主義的時代が始まったのである。この新時代は, 最高度に発達した段階では, おそらく, ヨーロッパと人類の全歴史に一時代を画する栄光に浴するであろう」²⁰⁾と宣言して, 〈三元主義〉に協賛している。「正教」, 「専制」, 「民族性」の「最高度の発達段階」とはどういうものか, いっこうに見当がつかないが, 「露魂欧才」的な社会発展を前提としているのは, 論文全体の趣旨から見て明らかである。シェヴィリョフはそのことをもうすこし細部にわたって検討している。ロシアは西欧との交流を通じて欠陥までも流入させざるをえなかったけれど, しかし, ロシア人は昔から受け継いできた三つの感情を保持しており, そこにロシアの将来の発展にとって基盤となる「種子」と「担保」とがあると, かれはいう。その「昔から受け継いできた三つの感情」とは, まず第一に「宗教的感情」であり, ふたつめが「国家的一体感」, 換言すれば「ツァーリと人民とが分かちがたく, 間をなんら遮蔽されることなく一つに結ばれているという実感」, 「ツァーリと人民の相互の愛と信頼」, 「人民が自分たちのツァーリに対していただく無限の忠誠心」であるという。そして第三の感情が, 「自分たちの民族性についての意識」というわけである。シェヴィリョフは, 西欧の「まちがった知的状況 (образование)」の模倣ではなく, このロシアの民族性に裏打ちされた思想や言論が実現してはじめて,

20) Погодин М. П. Петр Великий. — Москвитянин, 1841, ч. 1-я, № 1, с. 25.

ロシアにはしっかりした知的状況が根付くと考えている。²¹⁾ これがレールモントフの思想といかに相容れないものであったかは、想像に難くない。この御用文化人たちの顔色をなからしめること、それがレールモントフの隠されたもくろみであった。

5

レールモントフは『論争』で、〈西欧派〉も〈スラブ派〉も思いつかなかった、たいへん新しい争点を提起した。登場する二つの〈性格〉、シャト山とカズベク山のやりとりのなかに、注目しなければならない言葉が出てくる。〈покорить 征服する、服従させる〉という、生きるすべてのものにとって、存在にかかわるのっぴきならない問題を意味する言葉である。レールモントフはしだいに、〈征服する/征服される〉あるいは〈服従させる/服従する〉ことのない状態を理想とするようになっていた。人類の歴史が始まって以来、血で血を洗いあいながら、搾取し搾取されながら、犯し犯されながら数かぎりなく繰り返されてきたこの関係は、人間と人間、民族と民族、国家と国家、文明と文明の間の、もっとも基本的な形態としてあり続けてきた。しかしレールモントフが、そういうおぞましい関係から離脱し、超越したところに実現する自由があるはずだと、考えたことはたしかである。この詩を書いたころ、かれは покой (やすらぎ) につつまれ、それにひたる自由の境地を求める方向へ、決定的に傾いていた。

世界史はそのあとも、もっと苛酷でおろかでグロテスクな惨劇を、飽きずに何度も繰り返した。考えてみれば、それは「進歩・発展」と呼ぶものに、かならず付きまとして生ずるものである。〈развитие 進歩・発展・開発〉は、もっともよい意味で使っても、自然を征服するということと同義である。しかも、その征服する対象が人間や他の民族へ容易に変わりうることは、いやというほど目撃された事実である。レールモントフは、歴

21) См.: Шевырев С. Взгляд русского на современное образование Европы. — Москвитянин, 1841, ч. 1-я, № 1, с. 292 ~ 294.

史上類を見ないほどの規模で、人類の大多数が「進歩・発展」をめざした時期に生きていた。だからかれの理想はじつにむなしく、現実にはけっして実現を期待できないものだった。しかし、かれのこの問題提起は、時代の大勢に押し流されずになされたという意味でも、思想史的には評価されるべきである。

レールモントフの思想的成長を問題にする場合、直線的な軌跡を想定して、作品を位置付けるのは、まちがいである。たとえば、1836年に書かれた詩《Умирающий гладиатор》(『瀕死の剣闘士』)に見られる西欧文明批判の響きから、レールモントフのスラブ派への共感と接近を主張して、『論争』を、いわば「内論」の論争とみなすような方向のことである。エイヘンバウム(Б. М. Эйхенбаум)はいちはやく、レールモントフとスラブ派との関係に注目し、『論争』執筆時点を、「思想的動揺と矛盾の時期」と考えた。そしてこの詩では、東西文化の衝突という問題が「提起されているだけで、解決はなされていない」といいきっている。²²⁾ たしかに、成長し進歩する新しい文化や文明が古いものを支配してしまうのは、不可避的で必然的なことだという暗黙の前提に立って読むかぎり、この詩の中に答えはない。「進歩」は歴史の発展方向に沿っているのだから肯定的だという意識で(より正確には無意識のうちに)読むかぎり、エイヘンバウムのような結論しか出て来はしない。なぜならレールモントフは、〈Запад 西欧〉であれ〈Север 北の大国〉であれ、一時代をはるかに遡れば、〈Восток 東洋〉のそれであれ、一膨張的に発展する文明が暴力的で貧欲で、支配を求めてやまない本性をそなえており、それが人間や民族という存在に対して、はかり知れない不幸をもたらすと考えていたのだからである。『論争』のいちばん根底には、そういう実態に対する深くて陰鬱な怒りがある。この怒りは、ロシアの両首都に陣営をはってかまびすしく議論していたどの知識人よりも、はるかに深くに現実に根ざしていたというべきであろう。エイヘ

22) См.: Лермонтов М. Ю. Стихотворения (под ред. и коммент. Б. Эйхенбаума). т. 1, Л., «Сов. писатель», 1940, с. 332.

ンバウムは当時のソ連歴史学会の動向の影響をまともに受け、「提起されているだけで、解決はなされていない」と結論を出したはずの『論争』における東西文化の対立という問題について、わずか一年で（出版・発表の時期で算定して）主張を根本から変えてしまった。かれは1941年に発表した論文で「Стихотворение «Спор» сталкивает две культуры — европейскую с «азиатской». Россия движется на Кавказ как представительница европейской культуры и промышленного века. Таков неизбежный и естественный ход истории, такова роль России. 詩『論争』はヨーロッパ文化と〈アジア〉文化の二つを衝突させている。ロシアはヨーロッパ文化と産業時代の代表者としてカフカースへ進出する。それが歴史の不可避で自然な歩みであり、それがロシアの役目なのである」²³⁾と、明快な答えを出している。この「文化帝国主義的史観」にもとづく読解は、まさに「文化」背景を持っていたのである。こういった「新しい」読み方は、それまでのレールモントフ研究の分野には見られないものであった。1939年にはセミョーノフ（Л. П. Семенов）、キルポーチン（В. Я. Кирпотин）が、また翌40年にはギンズブルグ（Л. Гинзбург）がそれぞれ自分の著書のなかで、『論争』に言及している。それらの主張にはあれこれ賛成しがたい点はあるものの、1941年になってエイヘンバウムがやったような露骨な、特定の史観に従った読解はだれもやっていない。また、その気配も読み取れないのである。

1971年に出た《Литературное наследство》（研究資料シリーズ『文学遺産』）の43-44巻は、エイヘンバウムの論文の他にも、プムピャンスキー（Л. Пумпянский）とグロスман（Л. Госсман）が論文を寄せていて、『論争』についても論じている。注目すべきなのは、かれらもすでにエイヘンバウムと同じ方向で視点をそろえているということである。プムピャンスキーは〈東方〉と〈北〉の描き方の特徴を見ただけで、レールモントフがどちらに「優位性」を認めているか、明らかだという（引用²³⁾参

23) Семенов Л. Ю. Лермонтов на Кавказе, Пятигорск, 1939. с. 80.

照)。グロスマンも、〈東方〉が凋落と不活動性ゆえにロシアの武器の恩恵に頼らざるをえなくなっているということを、レールモントフは描いているのだと主張する(引用⁴⁾参照)。1940年頃は、レールモントフの詩とホミャコフの詩の比較を行ったネイマン(Б. В. Нейман)のように(「青銅の隊列」がホミャコフの詩の中の「青銅の砲口」を連想させるというかれの指摘は、わたしたちの推論を傍証してくれるものである)²⁴⁾時流に少し鈍感な研究者をのぞけば、ソ連歴史学界を席卷した「文化帝国主義的史観」が、レールモントフ研究分野も侵食し始めた、見ることができるであろう。

この傾向は年を追ってひどくなっていった。1947年に Гослитиздат(国立文学出版)から出されたレールモントフ4巻全集は、39-40年のものを全面的に編集しなおしたものであるが、作品ごとの解説は、「Сочувствие поэта и все его симпатии на стороне Казбека, однако Лермонтов не дает своим личным пристрастиям и симпатиям затемнить для него истинное содержание хода истории. В этом смысле «Спор» знаменует собой высокую степень зрелости общественно-исторических взглядов Лермонтова. 詩人の同情と好意はあげてカフカーズの側に寄せられているが、しかし、レールモントフはその自分の個人的な愛着や好意のために、かれにとって真実である歴史の歩みの内容をぼかしたりはしない。この意味で『論争』はレールモントフの社会・歴史観が高い成熟段階に達していたことを示すものである」²⁵⁾としてこの作品を評価している。そしてこの「定説」は1953年から出版されはじめた現行のアカデミヤ版全集(47年のものとは違って、полное〈全〉とはうたっていないが)にも受け継がれる。

「Стихотворение «Спор», изображающее вступление на Кавказ

24) См.: Нейман Б. В. Русские литературные влияния в творчестве Лермонтова. — В кн.: Жизнь и творчество М. Ю. Лермонтова. Сб. 1, «Худож. лит.», 1941, с. 442.

25) Лермонтов М. Ю. Полн. собр. соч. в 4-х тт., т. 1, М. —Л., «Гослитиздат», 1947, с. 358.

русской армии под начальством А. П. Ермолова («генернал седой»), является выражением зрелости общественно-исторических взглядов Лермонтова. Сочувствуя народам Кавказа, живо интересуясь их культурой и бытом, поэт в то же время убежден в том, что присоединение Кавказа к России и приобщение его к экономической и культурной жизни ее исторически неизбежным и прогрессивным. エルモーロフ（「白髪の将軍」）の指揮のもとカフカーズに進駐するロシア軍を描いた詩『論争』は、レールモントフの社会・歴史観の成熟ぶりを表わしている。かれはカフカーズの諸民族に同情し、かれらの文化や風俗習慣に強い関心をもっていたが、同時にまた、カフカーズがロシアに併合され、その経済・文化生活へ加入させられたことは、歴史的にみて不可避でかつ進歩的なことであると確信していた²⁶⁾というのが、アカデミヤ版の解説である。この全集の解説・注釈編があまりにも貧弱であることは、刊行当初から評判であったが、イデオロギー的にはこのように一段と「文化帝国主義的史観」を深めている。そして、その後ソ連で出された全集は、そろって同工異曲の注解を付すようになったから、まさにお手本としての役割は十分にはたしたわけである。

アンドレーエフ・クリーヴィッチ（С. А. Андреев-Кривич）はカフカーズのフォークロアと『論争』のテキストの関係を、比較文学的に追及する意欲的な試みを行った。かれの研究の成果には肯定的に評価してよいものがある。たしかに『論争』には、カフカーズの民話や神話の遺産から得たものがありそうである。そもそもシャト山とカズベク山の論争という設定自体がフォークロアの影響を強くにおわせる。しかし、この詩の主たる執筆動機からすれば、それはやはり副次的な問題だといわねばならない。ところがアンドレーエフ・クリーヴィッチも、せっかくの意欲的研究の最後に、とってつけたような「結論」を持ち出す。「Привлекая материалы народной поэзии и приводя данные биографического

26) М. Ю. Лермонтов. Сочинения в шести томах. т. 2-й, М. -Л., АН СССР. (Ин-т русской лит. (Пушкинский дом), 1954, с. 359 ~ 360.

характера, мы видели нашу задачу в том, чтобы представить важнейшую идею «Спора» об исторической неизбежности соединения судеб Кавказа и России, о торжестве принципа «промышленной цивилизации» в окружении реальных обстоятельств и фольклорных представлений. われわれは民衆詩の材料を導入し、伝記的性格の資料を引証したが、それは、カフカーズとロシアの運命の合一が歴史的に不可避であり、現実的状況とフォークロアの想像力の中であって「産業文明」の原理に凱歌があがるということこそが、『論争』の最も大切な思想であるという点を提示するのが、われわれの課題だと見ていたからである²⁷⁾。この大きな論文をおさめた論文集が発行されたのは、スターリンが死んで間のない1954年である。このような「結論」ないし研究目的が、まるで「身の証し」を立てるようにして書かれる必要があったところに、時流の強さが感じられる。

さて60年代に入ると、ソ連の「雪どけ」の影響もあって、あい変わらずアンドローニコフのような、かたくなに「定説」を守るものがいても、従来にはない説を唱える研究者が現れるようになった。ゲルシュテイン（Э. Герштейн）は、ひところ盛んだった「白髪の将軍＝エルモーロフ」説を批判するという形をとって、「定説」にとらわれない流れを作り出そうとした。彼女は、レールモントフが「戦争は不必要だというルソー主義的考えに」達していたことを指摘し、それが、長引くカフカーズ戦争という現実、そしてこの戦争の「全国家的意味」とその「残虐きわまりない形態」との間の矛盾という現実に基づいて、かれのなかに生み出された考えであることを主張した²⁸⁾。彼女の「全国家的意味」という規定には、まだ「文化帝国主義的史観」の母斑が残っているものの、全体の方向としてはそれからの離脱をはかろうとするものであった。ただ残念なことに、彼女の指摘は「白髪の将軍＝エルモーロフ」説の批判にとどまるもので、詩に含まれている全体の意味の解明までには達していない。

27) Андреев-Кривич С. А. Лермонтов. Вопросы творчества и биографии, М., Изд-во АН СССР, 1954, с. 126.

28) Герштейн Э. Судьба Лермонтова. М., «Сов. писатель», 1964, с. 357.

同じような考えを発展させたものとして、1973年に出たコローヴィン (В. И. Коровин) のモノグラフをあげることができる。かれはレールモン トフが〈文明〉とは、破滅を招くものであり、かつエゴイステックであり、人間存在に根ざす、ある種の本源的で、自然に確立した諸事実 (естественные установления) を死に至らしめるものだということを、『論争』のなかで唱えているという。また自然にとって、文明と、それを生み出した犯人である人間は、ともに敵対物だということが描かれているのだともいっている。このような読み方はそれまでのソ連にはなかった。かれはこういった新しい読解によって、『論争』がスラブ派批判を目論んで書かれたものであることを、立証しようとしたのであった。アカデミヤ版全集の編集の立場には、そういった問題意識は希薄であるから、欠落しているものを指摘するかぎりにおいて、かれの鋭さは有効である。しかしかれは、『論争』がスラブ派の「古い社会形態復活志向」を批判する詩だという観点にしばられて、テーマを矮小化したため、逆の一面化に陥り、詩に含まれる全体的意味をぼかしてしまった。「Его позиция вмещает и просветительский взгляд, и его преодоление. Она колеблется между признанием блага, которое несет цивилизация, и романтической критикой этой цивилизации, безжалостно уничтожающей природу. К покорению Кавказа стихотворение «Спор» имеет весьма косвенное отношение. Мысль поэта развертывается в философско-историческом, а не конкретно-историческом плане.かれの立場は啓蒙主義的見解も、また、その克服をも含むものである。それは、文明が福利をもたらすことを認めることと、容赦なく自然を破壊するものとしてロマン主義的に批判することとの間を揺れ動いている。カフカーズ支配については、『論争』はごくあたらすさわらずの態度しかとっていない。詩人の思考の展開するところは哲学的・歴史的な視野においてであって、具体的・歴史的視野ではない」²⁹⁾。こうしてけっき

29) Коровин В. И. Творческий путь М. Ю. Лермонтова. М., «Просещение», 1973, с. 54.

よくかれは、1940年のエイヘンバウムの線、つまり「動揺するレールモントフ」の線まで戻って終るのである。

コロヴィンの欠点は、スラブ派を一括して論ずるところにある。すでにのべたように、レールモントフが「論争」の相手とした「スラブ派」は、かれの想定するように「古い社会形態復活志向」型の考え方をしていたかということ、事実はまるで違うのである。ポゴジンやシェヴィリョフの「アジア的後進性と沈滞」に対する蔑視は、「西欧派」にまさるともおとらない。かれらが、文明に毒されている西欧に替わって、ロシアこそ、次の歴史の担い手にならなければならないと主張するのに対して、レールモントフは『論争』において、ロシアも本質的には「文明に毒された西欧」となんら変わらない、と指摘し、反論しているのである。レールモントフの論争相手は「スラブ派」全体ではなく、あくまでシェヴィリョフやポゴジンらを中心とする具体的個人であった。コロヴィンはそのことを見落としている。したがって、「剽窃」だの「ものまね」だのと誹謗された屈辱から生まれた、レールモントフの激しい、挑戦的執筆動機が見抜けなかった。コロヴィンは『論争』の中に描かれている〈東洋〉のイメージを、詩人自身のものと誤解している。このこともかれの的外れな読解を助長する原因になった。しかし、「定説」を打ち破ろうとした、かれの大胆な試みは、レールモントフ研究史においては、高く評価されなければならない。

1981年にレールモントフ研究史上画期的なレファレンス・ブック『レールモントフ百科』(Лермонтовская энциклопедия)が出版された。書物の性格からして、とうぜんソ連の学界における最大公約数的な見解を採用しているはずであるから、一読に値する。『レールモントフ百科』の『論争』の項目を、一言で特徴付けるなら、「折衷主義」といわざるをえない。従来の「定説」のあからさまな「文化帝国主義的史観」は影をひそめているが、それでもここかしこに残されているのに、一方ゲルシュテインやコロヴィンの指摘も採り入れられている、という具合である。これは、文学百科のもつ制約性に縛られているから、というよりは、自らの過去を、現在の顕在的・潜在的制約をのりこえて、この詩をより真実に近い形で読解す

ることが可能なほど、ソ連の学界が社会思想的、政治思想的、また歴史学的・哲学的に成熟していないことの反映と見るべきであろう。

6

さて、最後に残った問題を解明しなければならない。『論争』は誰と誰の、そして何をめぐっての「論争」か、という問題である。題名があまりにも直義的なために、かえっていろいろな憶測が入りやすい。だからテキストにそって素直に読むことを、まず心掛ける必要があるであろう。

この「論争」が、直接には、作中の二つの〈性格〉であるシャト山とカズベク山の間でなされた、山にとって人間が危険かどうかをめぐる議論を意味することは、確かである。ところが、北のロシアの大軍が、ウラルからドナウまでもの広大な土地を席卷して、いまや一路東に向かって進軍してくるのを目撃したとき、この「議論」自体が、吹き飛んでしまう。詩のこの構成のしかたに、全体の意味がかかわりのあることはだれも否定できないであろう。将来の予測をめぐる現実ばなれした、独断と誤解に満ちた「議論」から醒めてみると、弱者が容赦なく征服され、淘汰されていく、荒涼とした光景が目映るばかりである。つまり、こういった「議論」、「論争」の成立する余地などともとない、ということなのである。だから、カズベクはふかぶかと雲の帽子をかぶって永遠に黙りこくるしかなかった。—

И томим зловещей думой,	不吉な思いに悶え,
Полный черных снов,	見るのは黒い夢ばかり,
Стал считать Казбек угрюмый—	カズベクは滅入って数えてみたが,
И не счел врагов.	敵の数は分からなかった。
Грустным взором он окинул	かれは哀しげな眼差しで
Племя гор своих,	仲間の山山を一瞥すると,
Шапку* на брови надвинул —	雲の帽子を目深にかぶり,
И навек затих.	永遠に黙ってしまった。

[* Горцы называют шапкою облака, постоянно лежащие на вершине Казбека. (Примечание Лермонтова). (II-195~196) 山岳民たちはカズベクの頂きにいつもかかっている雲を帽子と呼んでいる。(レールモントフの注)]

この最後の詩行にレールモントフの同情を読みとろうとする読解が一般的である。しかし、これを同情と呼ぶのはけっして妥当ではない。あきらめと怒りとのないまぜになった感情というほうが正確である。〈西欧〉か〈東方〉かという、物質的な原理と精神的な原理とが対立点であるかのような前提にたってなされていた空虚な論争を尻目に、現実のロシアは、西欧の列強と覇を競いながら、東方に対して支配のためのあらゆる暴力装置（これもまた文明の所産である）をすでに駆使しているのである。この当時の〈西欧派〉も〈スラブ派〉も、すでに民族抑圧の方向へ「躍動」しているロシアの現実を分析できる有効な理論装置を持っていなかった。レールモントフの異議申し立ては、その点に集中していたのである。ここで『論争』という題名は、もうひとつの、隠された意味を持つことが判明したわけである。もちろん直接的な論争相手としては、〈西欧派〉は想定されていない。レールモントフが批判するのはポゴジンやシェヴィリョフの唱える、神がかり的なロシア・ショーヴィニズムである。詩人はこの批判を通じて、自分の肯定的で積極的なプログラムを提示してはいないし、することもできなかった。〈東方〉から学んだものは、被支配者を現世で解放する原理にはなりえなかったのである。ただ甘んじて運命を受け入れるしかないのである。カズベク山が「永遠に黙ってしまった」という最後の詩行には、レールモントフの、この一種のアジア的諦観が凝縮している。ただ、それはかれの理想とする、покой（やすらぎ）につつまれた свобода（自由）からもほど遠いものだった。

レールモントフは『論争』を『モスクワ市民』誌に突き付けはしたが、この大きな、解決不可能ともおもえる矛盾を胸に抱きながら、死の待ち受けるカフカーズへ、一路向かったのであった。